

レッド・ステイトで原爆を語るということ

松永 京子

アメリカでレッド・ステイト (red state) といえば、住民の大多数が保守主義の立場をとる共和党を支持する州を指す。一方でブルー・ステイト (blue state) は、リベラルの立場をとる民主党の票を多く集めた州のことである。スクリーンに映し出される北米地図上の赤と青は、アメリカ大統領選挙でおなじみの配色だろう。レッド・ステイトとして知られるネブラスカ州では、この「赤」という色が特別な意味を持つ。「トウモロコシの皮を剥く人」(corn huskers) という言葉から付けられた「ハスカーズ」(haskers) という名を持つネブラスカ大学リンカーン校のフットボール・チームのカラーが、まさにこの赤色なのだ。ハスカーズは広島のカープと同様に地元で熱狂的なファンを持ち、リンカーンではオフシーズンでさえ、赤いシャツや赤い車があちこちでみられる。そしてフットボール・シーズンになると一層「赤さ」が増し、試合直前にはフットボール・スタジアムに向かって「赤い海」(red sea) と呼ばれる人の群れが押し寄せる。多くのネブラスカ州民にとって、赤は保守主義や愛国心を示す色であると同時に、地元愛を示す色でもあるのだ。

私が大学院生としてネブラスカ州リンカーンで過ごしたのは、

二〇〇一年から二〇〇六年までの五年間である。この間、アメリカ全土を揺るがした様々な出来事は、アメリカ中西部のレッド・ステイトにも大きな影響を与えた。二〇〇一年九月一日のアメリカ同時多発テロ直後、リンカーンの大通りを歩くアジア人は(時には日本人でさえ)「パキスタンにかえれ!」といった無知で理不尽な野次を浴び、キャンパスでは「イラクに核を!」と書かれたピンク色のチラシがばらまかれた。また二〇〇四年ブッシュ再選直後には、まるで「世界の終わり」を告げられたかのように落胆した人々の顔がネブラスカ大学英米学科のあちこちで見られた。彼ら/彼女らは、この土地では少数派の民主党支持派だった。

このような少数派の人々によって毎年八月五日にネブラスカ州リンカーンで開催されるのが「ヒロシマ・ランタン・フロート」(Hiroshima Lantern Float) と呼ばれるセレモニーである。「ヒロシマ・ランタン・フロート」は三〇年以上続いてきた行事で、参加者はサクソフォーンやキーボードなどによる演奏をしたり、反戦歌を歌ったり、あるいはポエトリー・リーディングやスピーチを行ったりする。そしてクライマックスにはそれぞれの思いを綴った灯籠を湖に浮かべる。

二〇〇七年八月五日、「ヒロシマ・ランタン・フロート」に参加するため、約一〇〇人の人々がネブラスカ州リンカーンにあるホームズ湖に集まった。詩の朗読を頼まれていた私はこの日、二つの詩を用意していた。峠三吉の「影」と拙作「祖母に電話できない理由」(“Why I Can't Call My Grandmother”)である。周知の通り、峠三吉の「影」は、広島原爆の閃光と高熱によって石段に「焼きつけられた」影が薄れていくイメージを、忘却されていく原爆の記憶に重ねた詩である。一方で、「祖母に電話できない理由」は、入市被

爆者である「祖母」、南京大虐殺や「慰安婦」問題について教えてくれた「母」、ネブラスカで先住民文学を研究する現代の「私」の三世代を繋ぎ合わせたナラティブだった。この二つの詩を選んだのは、どちらも過去の原爆の記憶と私たちの現在の生活の繋がりを描いていたからだだが、そもそも過去の原爆の記憶と現在を結びつける傾向は「ヒロシマ・ランタン・フロート」の根底にあったといえる。主催者のネブラスカン・フォー・ピース (Nebraskans for Peace) は、ベトナム戦争の反戦団体として一九七〇年に設立された組織であるが、二〇〇七年の「ヒロシマ・ランタン・フロート」の景色は、まさに六〇年代後半のアメリカ対抗文化を思いださせるものであった。広島と長崎の原爆で亡くなった人々を悼むために開かれたこのセレモニーが、核兵器廃絶を訴えるだけでなく、戦争全般、とりわけブッシュ政権の「対テロ戦争」に対抗するアクティヴィズムとして機能していたとしても、不思議ではない。

「ヒロシマ・ランタン・フロート」は盛況に終わり、翌日、その様子が地元の新聞『リンカン・ジャーナル・スター』によって伝えられた。私がレッド・ステイトで原爆について語るこの本当の意味を知ったのは、この記事に対する編集者への批判の手紙が紙面に掲載されたときである。とりわけ、ネブラスカ大学で化学を教える自称「右翼プロフェッサー」(Right Wing Professor、略してRWP)の手紙には、レッド・ステイトのみならずアメリカで、どのような形であれ原爆を語ることは難しいという現実に直面させられた。残念ながら当時の新聞は手元に残っていないので、同日に彼のブログに掲載されたほぼ同じ内容の文章を紹介したい。

まずはアメリカを非難することでおなじみのネブラスカ住民の連中が、リンカーンのホームズ湖に日本の灯籠を灯して広島原爆を追悼したことを、リンカン・ジャーナル・スターが報道している。もちろんそれは彼らの勝手だ。広島と長崎の原爆のおかげで、ポール・オールソン「ネブラスカン・フォー・ピースの会長」やリーラ・シヤンクス「セレモニーに参加した地元のアクティヴィスト」の父親が日本本土で血まみれで戦う必要がなくなったことを忘れて彼らがそのようなセレモニーを行ったという事実は、単純に彼らの歴史的無学さを露呈しているにすぎない。しかし興味深いのは、この小さな罪祭りにおける日本市民松永京子氏存在だ。日本は、一九三〇年から一九四五年の間に犯した残虐な行為——中国侵略、南京大虐殺、「中略」パターン死の行進、韓国女性の性の奴隷の強要、捕虜実験など——に対する責任をきちんと取ってこなかった。もし松永氏が完全なる罪の意識を信じるのならば、日本で、いや中国で、罪悪感を感じる余地がたくさんある。なにも彼女の国が始めた戦争に対して応戦しただけのアメリカを非難するためにアメリカにまでくる必要はない。

したがってRWPは、このセレモニーは哀悼ではなく、日本の歴史の書き直しであると考えている。ネブラスカ住民がこのような不名誉な取り組みにとびつくとは、なんとも遺憾だ。

この文章の筆者が「ヒロシマ・ランタン・フロート」には参加せず、『リンカン・ジャーナル・スター』の記事を読んだだけで、セレモニーや詩の朗読の趣旨を理解したと思ひ込み、批判しているのは明らかである。けれども彼の文章で興味深いのは、第二次大戦中にア

メリカ人の命を救ったと彼がみならず原爆を正当化するために、南京大虐殺や「従軍慰安婦」といった日本のアジア大陸侵略の歴史を前面に出した点である。言うまでもなく、大日本帝国軍による戦時中の非人道的な行為への責任問題の追求はなされるべきであるし、日本の責任問題を無視して原爆を語るのが難しいことは拙作でも触れた。しかしここでは、原爆がアメリカ人の命を救ったと述べながらも、あえて彼がこの点を原爆投下正当化の理論的根拠に用いていない点に注目してみたい。

彼の文章を読んでまず私が思い出したのは、原爆の語りのなかに日本の戦争責任問題を取り入れた先駆的な作品として知られる、栗原貞子の詩「ヒロシマというとき」である。川口隆行氏はこの詩の「パール・ハーバー」という言葉に注目し、原爆被害と日本のアジアにおける加害責任を結びつけた栗原の「加害と被害の複合的自覚」は、「その出発にあったアメリカとの出会いを忘却、隠蔽することによって、表現化された」(『原爆文学という問題領域』一九七頁)と述べている。栗原の詩で「忘却」、「隠蔽」された「日本とアメリカとの出会い」は、ここでは「日本とアメリカとの原爆をめぐる被害／加害関係」として「忘却」、「隠蔽」された。すなわち、中国侵略、南京大虐殺、「従軍慰安婦」といった日本の戦争責任への言及は、アメリカと日本との原爆をめぐる被害／加害関係を曖昧にすることで、前景化された。さらにいえば、原爆投下正当化の根拠としては打ち出されていないものの、原爆がアメリカ人の命を救ったとあらかじめ述べしておくことで、アメリカの原爆投下当事者という立場が、中国や韓国と同じく日本に攻撃された「被害者」としての立場へとすり替えられている。この発言が、ブッシュ・チェイニー

政権の対テロ戦争を擁護する、熱烈な共和党支持者によって発せられたという事実も無視できない。「加害者」と「被害者」の立場のすり替えというレトリックは、対テロ戦争において何度も繰り返し返されたレトリックでもあるのだから。

レッド・ステイトで原爆について話すことは決して容易なことではない。ネブラスカで「右翼プロフェッサー」のような考えを持つ人は、他にもたくさんいる。広島でリトルボーイを投下した爆撃機エノラ・ゲイが組み立てられたのはネブラスカ州オマハ近郊であったし、九・一一直後にジョージ・W・ブッシュ元大統領が避難したのは、ネブラスカ州ベルビューにあるオフアット空軍基地戦略部隊本部であった。この地では、愛国心と地元愛が密接に結びついているのだ。

けれども希望は残されている。

ネブラスカ滞在中、私の担当したライティングの授業で、蜂谷道彦の『ヒロシマ日記』からの抜粋をテキストとして使う機会があった。「ヒロシマといえばパール・ハーバー」が返ってくるレッド・ステイトで、多くの学生たちは蜂谷の作品に共感し、はじめて真剣に原爆と向き合った。そしてそれは、レッド・ステイトで培われてきた彼ら／彼女らの歴史観と「正面对峙」することでもあった。レッド・ステイトで原爆について語ることは、ネブラスカのフットボール・シーズンに、あえて赤色以外のシャツを身につける行為に似ている。相手チームのカラーを身にまとい、野次や罵声を浴びながら、「赤い海」の流れに逆らうようなものだ。それでもレッド・ステイトで原爆を語る「少数派」が「赤い海」の流れに逆らい続けるのは、いつかはその海が終わることを、心のどこかで信じているからかもしれない。